



# 明日の路

五華内しびよ

「オオッ」

一陣（いちじん）の風に背中フードが遊ばれたあと、アスファルトを引きずりながら、低く何か追いかけて来る。

夜道に得体（えたい）の知れない者だから、思わず体をよじって振り向いた。

——大きな落ち葉だ——

足元を、素早く斜めに追い越して行き、車道を渡った縁石（えんせき）で、這（は）い上がれずに掴（つか）まっている。

ザワザワと風に震え、生き物のようで、今にもこちらへ返して来るかと気味が悪い。

私は、ひるむ心を悟られぬよう、威嚇（いかく）の眼差（まなざ）しを放さず、胸を張り大股（おおまた）の早歩きで通り過ぎる。あとはえーと、顎（あご）を引き肘（ひじ）はたたんで強く振るのだ。

こちらは週3日、夜更けに始めたウォーキングの心得。

吹き荒（すさ）ぶ木枯らし、それに大きな落ち葉も、この地へ晩秋（ばんしゅう）の覚悟を告げに来たようだ。「特大のカエデかな？」ドングリの葉が束（たば）になった人騒がせかも知れない。

おかげでなんだかおじけづき、空き地に揺れる枯（か）れ草や、垣根（かきね）に空いたのぞき穴も、いちいち横目で疑いながら進む。

にわかには風が騒(さわ)いで口笛を鳴らすと、電線をゆらして屋根を渡った。いたるところがざわめいて、思わず息を呑(の)みこんだ。車庫の陰やら玄関先、塀(へい)の奥の入隅(いりすみ)だとか。

——近所の枝の落ち葉たちだ——

取り取りに地べたを滑ると渦(うず)に巻かれ、どんどん中(ちゆう)を舞い上がる。なんだか楽しそうだがそれはそれとして、やはり気の散る困り者だ。

そこの、忍び込まれた家の人だって、どこの庭から飛んできたかは、きっと目星(めぼし)が見つかるだろう。

しかし、防ぎようは無いし、幼い子のするイタズラみたいなものなもの。明日の朝、かき集めるのがわずらわしくても、きっと文句は言えないのだ。

大きさは皆、猫やカラスの足跡ほど。どこを見渡したって、どうやら他には見当たらない。さっきの、道で出くわしたアイツのことだ。

だいたい、あんなお化けは迷惑だろう。掃除もそうだし、この路地を装う風情(ふぜい)が台無しになる。だからさっきは、偶然のはち合わせ。通りすがりの風来坊(ふうらいぼう)に違いない。

あ——プラタナス——神楽岡(かぐらおか)から？

思いがけず閃(ひらめ)いた。あそこの数え切れないうちの一枚が、風に乗って、きつとここまでたどり着いたに違いない。

木枯らしが騒ぐ暗い道を、負けないように腕を振り、忠別川(ちゅうべつがわ)の向こう、いつか丘の上の並木路を思い出してみた。

車のハンドルを握り、環状線が交わる十字路を西へ。フロントガラスいっぱいには別世界は広がる。

1キロ以上も真っ直ぐ続く通りは、はるかかなたで少し左に折れたあと、店並みを寂しくしながら公園の森へと消える。その両側に、延々と太くたくましいプラタナスの幹たちが立ち並ぶのだ。

絵画を眺めているような、対称と遠近をバランスしたみごとなコンポジション。不思議といつも、近づくまではそうでもなくて、絶景が目の前に現れて不意に思い知らされる。何かしら心を打たれたり、ノスタルジーを呼び覚ましたり。

ある日、焼けた陽射しに逃げ込めば、無限に重なる大葉で築く、輝きと静寂の回廊を潜(くぐ)らせたし、また別のある日には、鉛色の空と降りしきる雪の中、堂々たる牡鹿(おじか)の角の連なりに、どこまでも見張られている気がした。

すでに過ぎた夏の記憶と、やがて巡(めぐ)る真冬の情景。

「それなら秋はどうだった？」

このごろの、落ち葉のころの印象だけれど。

実はあの並木路を、延々と職場へ通った年月がある。思えば、毎年この時期に書入（かきい）れ時を迎え、仕事が山と押し寄せた。

目の回る毎日は、新年を迎える頃にやっと一段落したけれど、そのあいだ、自分と家族をずいぶん疎（おろそ）かにさせたのだ。

だからあの日、プラタナスの葉が木枯らしに舞って、その下を、上（うわ）の空で走り抜ける自分がいただろう。そうやって、時めく時代を切り抜けてきたのだ。

今夜の風で、あの路や店の入り口も落ち葉は埋め尽（つ）くすだろうか。たいへんな数だもの、くるぶしが隠せるぐらいは積もるのかも知れない。

空からどんどん降り止まぬ、大きな葉っぱを思い描いた。ひらりひらりと頭上を舞って、ついと目掛けたように降りかかる。

予想のつかない行方（ゆくえ）。気にせぬ振りをして行けば、どれかはひるがえして、みるみるこちらへ向かって来るのだ。「ヒュン」と視界を横切る影に、大の男が首をすくめたくなるかも。

ギザギザしていてツバメよりはコウモリ。サクラやイチョウに比べれば、どうしても殺伐（さつぱつ）としたイメージ。

当たって痛いはずが無いけれど、あの大きさだもの。今夜みたいな〈ちよっかい〉を出されたら。

一度か二度ならしょうがない。気には留めずにそのまま行こうか。

しつこいようならその代わり、足元の積み重なった幾らでも、そ知らぬふりで蹴散（けち）らしてやれ。

やってやられて行くうちに、どんどん景色の中へ溶け込んで、弾（はず）んでくるのは、きっと息だけでは無いのだろう。これが落ち葉のころの並木。誰もがわくわくと憧（あこが）れる路だ。

「ガサガサ」かき分けてどこまでも歩きたい。それなのに、そっとたたくみ埋もれてもみたい。真っ青な秋晴れの、どうせなら太陽のもとが良い。邪魔（じゃま）な大人の自意識は、落ち葉を集めて埋（う）めてやれ。

なんだか楽しかった。今日を終えようとする家並みを縫（ぬ）って、いつの間にかゴールは近づいていた。

いつもはくたびれる両足なのに、まだまだ拍車（はくしゃ）がかかる。そして今、思いついたことがあった。

実は、心配で駆（か）けつけてくれたのかも知れないと。あのころの、今ごろみたいでないかどうか――

脳みそに酸素が少し不足している？ それとも、忘れることにしておいた「青年の朗（ほが）らかな血」が、今さら騒（さわ）ぎ出したせいかも知れない。

そうだ、それはともかく――明日の朝、久しぶりに行って確かめてみようか。そういう事に時間を使う、後ろめたさは気にしないで。

（終わり）

明日の路

<http://p.booklog.jp/book/69567>

著者：しびよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sibiyo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69567>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69567>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ